

林羅山とその史學

肥後和男

林家は本朝通鑑の大成によつて近世史學史の上
にかなり重要な位置を占めて居ると思ふ。それは
幕府の事業として羅山の後嗣たる鴛峰の手により
完成されたものである。かの三百卷にもあまる大
部の史書が幕府の初期に當つて而も幕府の事業と
して企劃された事は種々の意味に於て注目される
べきものであるがこゝではそれを以て林家の史學
を代表するものと見この大成に迄導かれた林家史
學の淵源を鴛峰の父羅山に求めて彼の懷抱せる史
學思想を檢討し併せてそれが時代といかなる關係
に結ばれて居たかを少しく考へて見たい。

羅山の出現とその時代的環境

年譜その他によれば羅山の父祖は恐らく武士で

はなく町人であつたらしい。これはたとへ新學を
唱へたとはいへなほ文筆を世業とせる家に生れた
藤原惺窩などにもまして彼羅山が當代學界に於け
る純然たる新興者であつた事を示すものである。
吾々は先づこの事實に注意しなければならぬ。
なせかならばそれは自ら彼が學問世界へ入りこ
むについて選擇したところの學問と學風とを説
明する一の手引となるからである。彼より前の時
代では學問に志をもつ人々は恐らく僧となつたで
あらう。然るに彼は學問に志して儒者となつた。
儒者として敢然宋學に據つて漢唐訓詁の學風に反
對したのである。大體近世初頭に儒學が勃發した
ことは中世の初めに宗教改革が行はれ多くの新宗

派を發生せしめたことも對比して興味ある事象である。その原因を以て或は佛教の情落に歸せようとする。然しそれは必しも正しい解釋ではない。などとなれば平安朝に於ける舊宗派の頽廢はあの見事な宗教改革を生んだではないか。近世初頭に於てはそれと全くちがつた宗教の排斥が起つたのである。この現象はとりもなほさず近世の精神がその根本に於て宗教と相容れないものをもつて居た證明である。それは又いかにして儒學が起つたかをも豫想せしむる。儒學はその徒の主張に従へば人倫の學である。人倫とは君臣父子夫婦兄弟朋友の道である。これらの諸關係即吾々を圍繞する現實の社會關係を整へる事が近世初頭に於ける最大の問題であつた。この目的へ儒學の主張がいかに合致して見えるかは云ふ迄もない、織田信長が元龜四年七月京都市民―ある意味で國民の全體を代表するところの―に與へた定書はこの月に彼が

足利義昭を逐つて自立したことから考へると近世への最初の宣言とも見られるものであるがその中に彼は「儒道之學に心を碎き國家を正さんと深く志を勵す者」は忠孝烈之者と共に特に優遇すべき一條を加へて居る。近世の幄を先づ掲げたといはれる信長のこの規定は正にその後には於ける儒學の盛行を預言せるものと見られるであらう。こゝに國家といつて居るのは人倫の中この頃最緊要と考へられたものを舉げたのでその内容は人倫といふのとさまで變りはないのであらう。羅山がその學に志した一の動機はそこにもあつたのではなからうか。その文集卷第二、呈惺窩なる書の中に、

始余之心有虞於國家有待於君上

と云つて居る。三浦博士も嘗て論せられた如く、
○日本史の研究文
藝復興期の儒風
この時代に於ける儒學の勃興は單に惺窩羅山の出現によるのではなく寧ろ時代そのもの、要求であつた。その要求の根本的なものは

人倫諸關係の整理と確立であり時代は儒學に於てそのよき指針を發見したものである。誠に羅山も本朝神社考聖德太子の條に、

天之生萬物也人爲貴

と述べて居るがこの見地に於て彼は佛敎を以て人倫を無視し之を混すものとして反對し痛撃して居るのである。されば彼は寺院に學んで秀才の名を得たが周圍の熱心な勸説に拘らず斷然僧侶たることを拒んだのであつた。これ近世的精神の下にある彼に於て最當然な態度である。更に彼が儒學の徒として訓詁の學を斥け宋儒の説に従つたのはいかなる理由であつたらうか藤原惺窩が姜沆なるものに與へた手簡に、

日本諸家言儒者、自古至今、唯傳漢儒之學、而未知

宋儒之理、四百年來不能改其舊習之弊、却是漢儒

非宋儒、寔可憫笑。

と云ひ同じく林道春に與ふる書に、

漢唐訓詁之儒、僅釋二二句、費百千萬言、然淺近如此

といつて居るのは慶長日件録慶長九年閏八月三日の條に著者舟橋秀賢が新注古注の得失に關する將軍の間に答へて、

新注義理雖精緻、却而淺、古注其義雖不精、却而得道心處深

といへる態度に比し新舊思想の對立を示すものである。思ふに先人の注解を重んじて字義の解釋を主とする訓詁の學は傳統的な先例典故に没頭せる中世縉紳の生活自體と一致するものであると共に近世初頭の潑瀾たる精神とは相容れないものであつた。整然たる哲學的構成に於て宇宙と人生との構造と發展を説き示さんとする宋學こそ新しき時代の要求する正にそのものであつたのである。それは又社會の再構成に熱心に従事しつゝあつたこの時代の時代精神とも合致するものであつたら

う。體系と組織とを欲する理智的要求は吾々が認めて近世的精神の重要な一要素とするものであるがこの時代は確かにかゝる精神の鮮かに發現し始めた時代であつた。この一の現はれをこの宋學の採用に於て見ることが出来ると思ふ。近世人として儒學に志した羅山がそれに従つたことはまた必然の勢であつた。以上はこの時代に於ける儒學の勃興を主として時代の要求に於て見たのであるがその盛行の結果は當然様々の思想がいづれも儒學的形態に於て語られたといふ事は見易き道理である。それは以下史學を述べる際にも充分注意されなければならぬ。

儒者としての羅山の出現をその時代的環境に於て見來つた私は更に同様な態度を史家羅山に對して試みるのであらう。中世末期は日本社會の改造期であつたとする通常の見解はその時期に於て多くの古きものがその存在を失ひ凡て新しきものが

これに代つたであらうといふ豫想に導かれる。上述した學問史に於てはこの豫想が正に適中した様にも思はれる。かゝる時代に於て歴史の如き過去を取扱ふものは恐らく一顧だにも値しなかつたであらうとも見られる。然るに事實はどうであつたか。吾々は案外にもその時代に於て歴史への關心が次第に高まつて行き種々の史書を生むに至つた事實を肯定せしめられる。この一見して矛盾と見える事象はいかに解釋さるべきであらうか。この解釋を幾分可能なる如く思はしめるものは歴史の本質に對する一の見方である。即歴史を以て單なる過去の再認識又は單なる過去の現代への抗議とせず理想追求の學と見ることがこの時代に於ける歴史への強き關心を説明するであらう。

應仁の亂を以て始つたと稱せられる中世より近世への過渡期の大爭亂は最後迄その最初の性質——即有力な武士階級の相互鬭争——を持ちつゝけた様

である。それは等しく社會の改造期であつたとしても新文明の輸入を基礎とした大化の改新や公家主義に對する武家主義の主張のをもつ鎌倉幕府の創立などは全くその性質を異にするものである。彼等の激しき鬭争の結果出現を期待せらるゝ新社會の理想は畢竟傳統的なものに求めなければならなかつた。そこでこの改造は實は傳統への復歸を目的とするかに見えた。内大臣信長や關白秀吉や將軍家康などことごとく傳統的稱呼を襲へるものである。而してこの時代に於ける國民精神の横溢と昂揚とは傳統日本に對する自信を著しく強めたのであつた。これらの事情が相俟つて國史の探求を需めしめたのであらう。そして新時代の永久性を望めばのぞむ程國史への顧慮が深められた事は自然である。かくしてこの時代に歴史が要求さるゝに至つた理由は幾らか説明されたかに思はれる。秀吉が儒者を招いて系圖の學問をした事

が秀吉事記に見える。彼が自己を以て藤原、平等の歴史的貴性に附會せんとしたことは少しく滑稽にも見えるが新しき自を古き歴史に結びつける事が彼の時代では甚だ必要であると感せられたのである。然らば家康が百年の大計の爲にあらゆる古書を蒐集し歴史に關して學者と談論を交へ細川幽齋によつて足利家の制度を尋ねたことなどはあまりにも當然であつた。吾をして儒者羅山を以て一箇の史家としての考察を必要とせしむるに至つた時代の空氣はかくの如きものであつた。

而して儒者羅山が同時に歴史家羅山であり得たのはいかなる理由によるのであらうか。これには凡そ二の事情が考へられる。第一は學問及學者の文化が十分でなかつた事である。學問は文字を通じて行はれたから文字を識る者は又凡ての學問にそして屢文學にも關係したのである。この點で當時最困難な文字學である儒學に従事したものが歴

史家を兼ねることは寧ろ普通であつた。第二の點は儒學存立の一の基礎が歴史であつた爲であらう。なんとなれば儒者はその道を以て先王の道とし述べて作らざるを標榜したのである。春秋を以て五經の一に加へた彼等にとつては歴史も亦道を戴せるものであつた。かゝる事情が儒者をして屢歴史家たらしむる傾向を生んだものであると思ふ。

羅山の史學

彼の歴史に關する修養は凡ての人に同じく先づ史書を讀むことに始まる。年譜慶長九年の條に彼がこの年迄に讀破せる書目四百十餘部をあげて居るがその中歴史に關するものは春秋左傳、史記、漢書、後漢書、荀悅漢紀、袁宏後漢紀、吳越春秋、通俗演義三國史、唐鑑、通鑑綱目、十八史略、紹運圖、史學提要、十七史纂古今通要金史、皇明通紀、皇明一統紀要、大明一統志、等の支那史及日

本紀、神皇正統記、延喜式姓氏錄、倭名類聚抄、職原抄、禁祕抄、名目抄等數部の和書であつた。この時彼は二十二歳であつたがなほ本朝官職の事を菊亭晴季に神祇道を東山の老僧に聽いたと云つてゐる。彼の史學に對する修養は儒學と同じく年と共に進んだことであらう。又應て幕府に仕へてその書庫を管し又家康の古書搜索事業の進捗に伴つて愈その歩を早めたことゝ考へられるが今それを一一跡づけることは省略しその史學に關する著述を見て行きたい。

彼は史書を讀むと共に自ら歴史を書きたいといふ希望をもつた様である。羅山先生文集の編者も、
先生常有欲修國史之志

と云つて居るばかりでなく文集卷第三十九に收めた王仁以下四篇の小傳は彼が少年時代の作といふ事であるからこの志はかなりに早くあらはれたのである。その後謂ふ所の修史の志を抱きながらも

史料の不足その他の爲に短い小論考の外に纏つた史書は出来なかつた様であるが寛永の末に至り幕府の大編纂事業を擔任する事によつて一通りその志を遂げる事が出来た様である。この事業は最初諸家の系譜を纂輯する目的であつたらしい。寛永十八年二月に始り二十年九月に至つて完成した寛永諸家系圖傳がそれである。好書故事卷二十八に著名近藤守重はこの書に關し封建制にとつて最必要なことは「在_レ奠繫世_レ辨_レ昭穆焉」といひ、

今ヤ封建之制和漢古今ニ卓越ス御三代ニ逮_レア比ニ系圖ノ撰アリ嗚呼至_レル哉

といつて居るのはこの事業のもつ意味を最よく示したものでかゝる事業が企てられたことは即封建制度の形式的完成を意味するものであるが事實上それを擔任したのは羅山及其の一門であつた。この間更に彼は將軍の命をうけ本朝神代帝王系圖、鎌倉將軍家譜、京都將軍家譜、織田信長家譜、豊

臣秀吉家譜等を作つたがこれらは諸家系圖が一門一家の私的傳統を主とするに對し公的政權の傳統を明かにする目的であつたらう。この仕事は隨分忙がしかつたと見え彼が石川丈山に送つた書簡の中に、

忽忽擾擾^{○中}唯披本朝之書而拋中華之籍、唱姓氏之分差而廢詩文之品藻、雖非素志而官事無監也而

と云つて居る。純粹の史家になりきれなかつたことは儒者羅山として已むを得ない事であつた。翌正保元年再び命せられて本朝編年錄の編輯に着手し年を経て慶安三年に至つてひと先づ完了した。神武天皇より宇多天皇に至る編年史であつて四十卷を以て終つて居る。宇多天皇以後に筆が及ばなかつたのは主に史料の不足の爲であつたらしい。それは正保の火災にほろびて今はそのまゝの形を見る事が出来ない。但し本朝通鑑の正編は林家に残つた本朝編年錄の稿本を補正したものであるか

ら大體あんな形のものであつたらう。次に羅山の史學を見るべきものは本朝神社考六卷である。その正確な著作年代は私の知らざるところであるが日本の神社の歴史に於て最も注目すべきものである。又それを抄説して神社考詳節を作つた。源平綱要、明德軍志等は今^レ亡びて見ることが出來ない。羅山先生文集には多くの史論、考證の類を收め又本朝編年と題する神武天皇以降開化天皇に至る簡單な編年史を載せて居る。

これらの著述を以て彼が懷抱せる史學一般の具體的な表現であるとすればその史學一般なるものは何であつたらうか。彼はそれを言葉の上で明瞭に現はして居ない。然しながら彼が歴史を以て鑑戒なりとした事は略信すべきであらう。これは東洋に於て歴史に關する古き傳統である彼の本朝編年録、源平綱要、明德軍志の如きはいづれも通鑑に倣つてかゝれ本朝編年は通鑑綱目之法によつた

とあるから彼がこの考を有した事は略疑がない。然し資治通鑑等が支那に於いて寧ろ治者階級の爲の編纂であることを思ひ又彼自身が、

讀史漢宜監君臣得失治亂興亡

と云つて居るところから見れば彼が歴史を以て身を律すべき人々の範圍に一般民庶を加へて居たか否かは疑ふべきである。本朝編年録已下各將軍譜の如きは幕府の爲の纂輯であるからそれを利用すべき人々の中に民衆が考慮されて居なかつたらう事は云ふ迄もないが羅山自身も一般民庶を考慮せる歴史を書く意志は結局無つたであらう。かくして彼の歴史は萬人の鑑ではなくいはゞ治者達のそれであつた。これは近世の社會組織に於て極めて自然な成行であつたと思ふ。少くとも彼の時代に於てはそうであつた。

鏡は明澄でなければならぬ。鏡としての歴史はいかにして明澄たり得るであらうか。それも亦

明らかに述べられては居ない。然し、事實を直書することがこの目的を果すものであると考へたことは略察せられる。彼が熱心に史實を考證し事實の確立に努力したことは歴史を以て事實の學とする精神の現はれでなければならぬ。鶯峰は徳川光圀と談じて、

據事直書其義自見○國史館日錄寬文四年十一月廿八日の條

と云つて居るがこれは羅山も蓋同意見であつたらう。この意味に於て彼は先づ事實を求むるに努めた。文集卷二十四に載せた土階三尺論及太公論は編者が「共是 先生得意之文也」といへるものであるが前者は堯舜が天子として富四海を保ち其の冕旒衣裳必しも粗賤ならざるを證し土階三尺の傳説を疑つたものであり後者は太公を以て一介の漁夫とするを疑ひ侯伯之裔賢にして漁に寓するものかとしたのである。前者は儒教に於て神聖なる傳説であり後者はまた武王の成功にまつはる傳奇的

な物語であるが共に彼の疑ひを免れ得なかつたのである。又「聞古來之疑而解衆人之惑」たと編者が誇稱する浦島子辯、惟喬辯は文集卷第二十六に收めて居るがそれも共に傳説の誤を考證したものであつた。本朝編年録の編輯に當つては最も考證に重きを置いた様である。本朝通鑑成務天皇の條に、
戊辰四十八年春三月、立皇姪足仲彥尊爲皇太子 日本武
子、時年三十一 ○今按、景行四十三年日本武尊薨、至今歲、六十
六年也。此曰足仲彥三十一歲、則以成務十八年爲誕生也、考
之、則日本武尊薨後三十六年、豈有死後生子者
乎、雖有疑焉、舊記皆云爾、則今無可據考焉。
とあるは文集に「編輯之次多所發明者載在其分註」といふ事から考へて恐らく羅山の作と思はれるがこれなどは上代史の研究史に於て多分始めて起された疑問であらう。そこに彼の研究態度の一斑を窺ひ得る様である。いづれにしても幻怪偽誕之説は歴史家として彼の耐へ得るところではなかつた。彼はその爲に史料の蒐集と甄別とに努力を惜まなかつたのであるが前者について特筆すべき

は國史の研究に於て最海外の史料に注目したことである。本朝編年録の編輯に當つては支那及朝鮮の書にして日本に關する記事を載せたるものを涉獵し日本考及朝鮮考を作つた。これは共に正保の火災に遭つて亡びたが本朝通鑑編纂の際には鶯峰が之に倣つて國史外考を作つた。元祿に松下見林が異稱日本傳を作つたのもかゝる先蹤を發展させたものであらう。豊臣秀吉家譜を作る際にも「中華朝鮮之事記」を參照したと云つて居る。これは全く近世初頭に於ける我國民の智識圈の擴大を反映するものであつてその結果は必しも國史の研究に偉大なる實績をあげたわけでもないが後來の國史研究に對し重大なる指針を與へた功績はこれを否定し得ないであらう。少くとも上代の國史が支那朝鮮の史料と一致しない點のある事を指摘しただけでもこの時代ではすぐれた着眼といはねばならない。

凡東國通鑑所載、本朝三韓或交通或戰爭、多與國史不合(本朝通鑑原中天皇の條)。

考證學の出現は近世史學發達の一大原因をなすものであるが彼の如きは正にその先驅者に推さるべきものである。而して彼が事實の判定に於て標準としたものは理であらう。

天地造化之迹、苟不以理推之、必入幻怪僞誕之說而終不能明、故君子窮理之爲要也

とは火雷神辯に云ふところであるがその合理主義を表明せるものであらう。この立場に於て多くの傳説はその根據を失ふものである事前述二三の例によつて之を知り得るが神話の如きものはいかに取扱はれたであらうか。それには二つの態度が豫想せられる。一はこれを以て迷妄に過ぎずとするものであり他はこれを譬喩として解せんとするものである彼は神代の取扱ひについてあまり意見を述べて居ない。本朝神社考に於ては神話をそのま

に載せて居るが神武天皇論に於て天孫降臨は支那の古聖人又はその後裔が我が西陲に至るを意味するものであらうといつて一の人事現象として居るのを見る。一面に於て譬喩説をとつて居た事を察し得るのである。これは又實證主義的精神の發現とも云ひ得るであらう。この傾向は纏て山鹿素行をして「本朝ノ上古天神七代ト云ヘルハ天地開闢ノ初ニナリ出マシマス御神ニシテ神人ナリ聖人ナリ」といはしめ更に新井白石に於て有名なる神とは人なりといふ言葉を發せしむるに至つたものであると思ふ。只白石が高天原を常陸にありとしたりに反し海外に皇室の出自を比定したところは時代環境と時代精神の相違する爲であつたらう。いづれにせよ羅山が史實の探求に於て合理主義をとつたことは疑はれない。

斯くの如くにして事實を明かにし之を直書せばそこに歴史の目的が自然到達せられる事になる筈

であり孔子春秋を作つて亂臣賊子をおそれしめたとあるが吾々の心情は多くの場合それだけでは満足し得ないのである。勸懲自見るゝ事が待ち切れない。明かに是を是といひ非を非といひたい誘惑は道の爲に古を求むるものゝ免れ易からざるところである。羅山子もその一人であつた。彼は自ら國史公、本朝青史公、大史公、君子等と稱して史上人物その他の論贊を試み時に痛烈なる批評を加へて居る。例へば楠正成傳の終に、

君子曰藤房去之、正成死之、建武有二忠焉

といひ欽明天皇辯に於ける

夫欽明者我朝之孝明乎、稻目者我朝之楚英乎、夫二明之同名也何爲明乎彼而暗乎此也、若令帝踐尾與鎌子言則可謂明矣、下則遺千歲之惑不可謂明矣、然則欽明帝之爲明也何

といふ批難の如きそれである。かゝる批評を支持したものは云ふ迄もなく人倫の思想であつた。君

臣、父子、夫婦すべて五常の道に叶ふものは著しく賞されこれに反するものは貶せられた。例へば開化天皇は悉庶母すといつて「嗚呼三綱絶矣亦孔之醜」と評する如きこれである。佛教の排撃されたのもそれが人倫にもざるといふ理由からであつた。この思想が儒教的形態に於て述べられて居ることはいふまでもない。なほこの外に彼が史評の規矩となつたものは國體觀念であつた。神祇寶典の序に、

夫 本朝者神靈之所挺生而棲舍也、故推稱神國其實號神器、守其大寶則曰神皇、其征伐則曰神兵、其所由行則曰神道

と云ひ神道は即王道にして我が國の大本なりと考へた。然るに中古佛教傳來してこの道を汚してより神明の光明かならず事物としてその穢染を蒙らざるなしとしたのである。

我朝神國也、神道乃王道也、一自佛法興行後王

道神道都擺却去

聖德太子などが激しく批難されたのはこの爲である。而してこの儒教的人倫の立場と神道王道の立場とはいかなる關係にありやといへば結局兩者は一致するものと考へた様である。文集第六十六に、

或問神道與儒道如何別之曰自我觀之理一而已矣其爲異耳

といひ只表現を異にするだけで結局は同一の理であるとしたのである。吳大伯或は夏后少康の子孫來りて我皇室を開きたりと考へた事は多少はこの原理を歴史的に證明する意圖であつたかも知れない。かゝる神儒習合は後世國學者達が手酷しく批難したところでありその方法としてはかの神佛習合と何等異らないのであるがそれだけに又いかなる時代でも二の原理をとるものが結局陥らなければならぬ陷穽を示すものであらう。それはとにかくこの神儒習合はその證明に於て頗る疎漏であ

り少しも必然的な説明が加へられて居ないといはなければならぬ。

かくの如き歴史はいかに叙述されたかといへば東照大神君年譜序に、

編年則古史之法也

といひ本朝編年録、本朝編年、各將軍家譜等皆編年體に從つた。彼は始め通鑑綱目をよみ後に通鑑を讀んで

古今治亂君臣得失、炳如日星、可謂殷鑑不遠、古人云遺書似復麟信哉

と跋文に書いた位でその編著も多くはそれに倣つたものであらう。これその編著が目的に於て又手續に於て「編集歷代君臣事迹」○進資治通鑑表し君王萬機の政に資せんとした通鑑と略併行するものありし爲でもあらう。

この方法は歴史の基礎觀念たる時の觀念を最明瞭に示すのみならず記述も容易であるから古史の法

多くは之に從つたのである。

これらの主張及方法は本朝通鑑に於て全くその儘に繼承されて居り鶯峰は要するに林家に於ける紹述先生であつた。

日本の史學史に於て近世はともかくも注目すべき時代であらう。史家と史的著述の出現せる量は外形的にその隆盛を物語るものであるが内面的に見てもその思想に於て方法に於て見るべきものが甚多い。それらの中に在つて林羅山の占むべき位置は決して輕視さるべきではない。その歴史に道を見る主張、事實の探求に對する努力實證主義的合理主義的方法等の如きは單にその家のみならず近世史家の多くは繼承せるところであつた。勿論彼の達し得た高さを誇張することは許されない只いかに低くとも容易に取拂ひ得ない礎石を置いたことは認められなければならないと思ふ。